

先進国研究

多文化ソーシャルワーク エスニシティグループへの支援

山口幸夫

はじめに

エスニックコミュニティの伝統芸能を核とする絆とそのアイデンティティの継承発展について、北米日系太鼓の3つのパイオニア・グループ、1サンフランシスコ太鼓道場、2カリフォルニア緊那羅太鼓、3サンノゼ太鼓の3の流れを汲む和太鼓のリーダーと面談、アメリカにおいて新規日系移民が少なく3世等が拡散居住していくなかで、日系グループが従来の物的空間的コミュニティベースではなく広域に散住する個人の文化的アイデンティティ求めるニーズにどう対応するかの調査を行った。東日本における定住人口減少、若ものが都市部に移住する中で、どのように復興を行うかの参考とすることを目的とする。広い意味での和太鼓の戦略は物的地域の定住人口の集住によってコミュニティを維持する戦略が採れないため、一定の伝統行事による(お盆など)広域にすむ日系コミュニティの文化継承発展をとっている。また日系やアジア系でない、アートとしての和太鼓の活動による広範なアメリカ市民への普及・太鼓ブームも広い意味では日系の文化継承に寄与している。これらは伝統文化をささえる交流人口を増やす為の多様な戦略であった。執筆中の書籍(東信堂)の一部として発表予定

研究目的

災害時におけるエスニシティグループの支援、特に中長期的支援については我が国に十分な蓄積がない。本研究は移住者・エスニシティグループ支援ソーシャルワークの実践に関する先駆的事例について学び、日本での災害復興に向けたエスニシティグループへの中長期支援・実践にフィードバックする事を目的とする。

アメリカ日系人の伝統芸能を核とするコミュニティ文化継承

災害、強制移住、社会的疎外など危機におけるエスニックコミュニティの生き残り戦略としては伝統芸能を核としたソーシャルキャピタル強化とコミュニティ再建手法が有効であった事例が散見される。

伝統芸能の精神的世界、年中行事、踊りの維持のためのグループワーク、地域社会経済のためのまちおこしコミュニティ開発組織形成の核となる。

アメリカの日系人などアジア系アメリカ人において災害や強制移住、拡散化などのなかでどのようにコミュニティを継承発展していくか、そのなかでの伝統芸能の役割について考察した。

こうした、アメリカの伝統芸能(盆踊りと和太鼓)についていくつかのオーラルヒストリーアーカイブがある。アメリカの日系人強制移住後のコミュニティ復興で伝統芸能はコミュニティ再生のソーシャルキャピタルの規範となったといわれているが、具体的にどのような経緯だったのか、3世、4世の郊外化、拡散の時期にその有効性はどこまで続いたのか。

たとえば、リトル東京など日系集住拠点の形成とその後発展がどうなのか、リトル東京は再開発で復活したと言われているが、こうした物的コミュニティと広域に拡散した関係を考察した。

日系仏教の太鼓は2系統に発展変遷していた。

◎音楽ハイアート系 アジア系の太鼓 国際的な和太鼓から芸術に

ミュージシャンとしてジャズやピアノ、モダンダンスとのコラボ

ニューヨーク Kaoru Watanabe ハワイ Kenny Endo 氏および夫人

◎伝統(民族)芸能 地域文化それぞれの土地固有の文化を含んだ和太鼓

* 地域伝統芸能型(地域的民主的) お盆のお囃子チーム、

ロスアンジェルス リトル東京 強制収容からの帰還、就業、まち作り、郊外化、拡散

ハシエンダ 台湾・香港 中国系の集住地、仏教組織と文化継承

ハワイ ワイキキ 盆踊り ゆるやかな統合

* パフォーマンス型伝統和太鼓(習い事・体育会系的)

日系人は階層上層化、高学歴かつ裕福な層が増加し、新世代の日系人達は集住しなくてもよく下町の日系人集住地域から郊外住宅地に拡散している。また中国、韓国のように新規移民が入ってこないため、また白人を主とするエスニック集団とも婚姻、希薄化している。

新規移民は個人で来た移住者で学歴等が高い、必ずしも地域の日系社会とだけで生きていかない。

人種差別と闘いながら移民として苦労した日系1世はアメリカに忠誠であることを、戦場で証明し日本との絆を断ち切らねばならなかった2世、その影響は次世代にも及んだ。親からアメリカ社会に溶け込むように教えられてそだった3世、その子どもの4世は自然にルーツについて考えている。

和太鼓はアジア系のアートのジャンル民族音楽から国際音楽に変質していきのこる。伝承者は固有の文化性をどのように学び継承していくのか？子どもへの日系人人口の急速な少子化のなかで文化伝承・しつけを期待する太鼓教室のありかたが模索されていた。

コミュニティの維持、物的地理的コミュニティだけでなく広域に散住する個人の文化的アイデンティティ求めるニーズにどう対応するか。日系アメリカ人のコミュニティ継承発展戦略は新たな次元に入っている。

過疎地である被災地のコミュニティ継承発展について祭りには帰省する、故郷との絆をもちつづけ、それを希望の糧として大都市で仕事している。引退したらUターンして故郷で暮らす。

福祉や観光産業も含め被災小都市が生き残りの復興をしていく上で、従来型ではない多様な戦略について知見を得た。

それは、アメリカにおける新規移民が少なく拡散していく日系、従来のコミュニティベースではなく広域に散住する個人の日系文化的アイデンティティ求めるニーズにどう対応するか。広い意味での和太鼓の戦略は物的地域の定住人口の集住によってコミュニティを維持する戦略が採れないため、一定の伝統行事による(お盆など)広域にすむ日系コミュニティの文化継承発展をとっている。また日系やアジア系でない、アートとしての和太鼓の活動による広範なアメリカ市民への普及・太鼓ブームも広い意味ではアメリカの国民が日本の文化の価値を共有すると言う意味において、日系の文化継承に寄与している。これらは伝統文化をささえる交流人口

を増やす為の多様な戦略であった。

日本の伝統芸能を核とするコミュニティ文化継承

大槌では現地での経過についてインタビュー及び参与観察を続けている。一部の漁協や伝統芸能関係者がまちづくりや地域の振興のための中長期的展望を持ち始めてきた、発災後、3.11から1ヶ月ほど過ぎ桜が咲き始めた頃各地域で最初の伝統芸能の披露の場が持たれた。しかしアルタナティブソーシャルワーカー、まちづくり専門家もコミュニティオーガナイズ的なアプローチをしない、各時期でどういったことは起こるのか、被災住民に告げ、予測できるようにしてコミュニティリビルドをはかるアプローチが弱かった。

日本の高度成長期の過疎化によって多くの伝統芸能が途絶した。その後、地方都市において公共事業と自動車の普及と工業の地方への展開、地域の兼業農家の就業所得保障政策がとられるなか、就労人口や定住人口の歩留まりをどれだけ上げるか、退職者や帰省者、大都市出稼ぎ者を含めた広域ネットワークとしての生き残りの戦略のひとつとして、伝統芸能が選ばれた。

それは地域の固有性や地域の精神文化を大切にではなくまれ、地域の多世代交流によって維持発展していく、踊りを踊る者は帰ってくる。伝統芸能の仕組みそのものがコミュニティ再生の仕組みであったからにはほかならない。

地域の当事者を主体にしつつ定住人口ではなく交流人口を増やし、祭りには帰省して参加する、故郷との強い絆を維持薬店させる、将来はこの地域に中長期滞在する人口を増やす。それが、産業や雇用機会、退職者を含めた定住人口の激減を防ぎ地域の生き残りを可能としていく。

むすびにかえて

知見からは伝統芸能、観光、福祉産業、地域の環境保全などの環境福祉社会開発型戦略の可能性がうかがえる。

交流人口ふるさと納税と新しい公共財政的には「ふるさと納税」ふるさと(*出身地以外でも自分が貢献したいと思う都道府県・市区町村*)への寄付金のようなコンセプト。またさらに新しい公共として寄付免税資格を持ったNGOがこうした地域作りに参与することを推進し災害に強いしなやかなコミュニティ形成のためのに居住地と人文環境生態環境。人と環境に働きかけ持続的な発展を維持していくべきであろう。

このようなコミュニティグループの戦略は以下である。

1) 地域コミュニティの健全な発展、ふるさとの絆を目的とする伝統芸能の継承と発展させるための以下の特徴を持つ事業

* 子どもから高齢者まで、外国籍等市民など地域及び地域をふるさとと思う誰もが参加できる。(多世代・多文化・多様なふるさとの絆)

* 様々な伝統芸能を愛好する人々が参加できる。(多種目)

* 初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる。(多志向)

* 質の高い指導者による、個々のニーズに応じた指導計画(専門性)

* 地域への貢献と心豊かなふるさと文化の創造(ふるさと文化)

- (2) 3世代交流による児童および青少年の健全な育成を目的とする事業
- (3) 子どもから高齢者までの地域参加を促進する事業
- (4) 会員間および地域との交流をはかる伝統芸能および文化交流事業
- (5) 伝統芸能の基盤となる生態環境の維持管理に関わる事業
- (6) 活動拠点となる施設の維持管理に関わる事業

詳細については文献データとともに論文に集約中である。